2012年1月10日18時半～20時半
立教大学
「3・11後の国際協力人材育成とは～アジア・南米・アフリカでの過去の教訓から考える～」

アフリカ援助・モザンビーク プロサバンナ事業

舩田クラーセンさやか
東京外国語大学

参加者の皆さんへの問い

① 誰の、何のために、日本の政府開発援助はされるべきでしょうか？

② その「担い手」は、誰であるべきでしょうか？

回収アンケートでの皆さんの答え

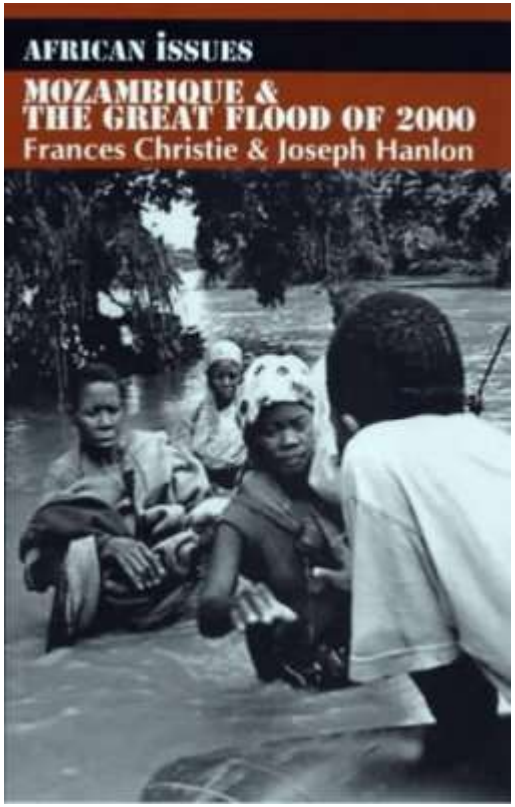
- 誰の何のため？
  1. （途上国、受益国の）人びと（若者、貧困者、子ども、苦しむ、助けを求める人びと）のため
  2. 「国」のためと①：発展途上国、受益国、アジア
  3. 日本のため（自分の利益、被災地のため、国益）
  4. 世界の（住民）ため
  5. 日本が搾取した歴史のある国の人びと
  6. ①と③のため

自己紹介
～「国際協力」に関する考えの土台

- 1990年代初頭　大阪での学生時代
  - 国際ボランティアを推進するためのNGO立ち上げ
- 1994年～05年　神戸での大学院生（修士）時代
  - モザンビーク国連PKO活動に国連ボランティアとして派遣
  - 阪神淡路大震災で震災ボランティア団体立上げ、「神戸こども祭」開催
- 2000年～04年　東京・関西での博士・研究員・妊産婦時代
  - モザンビーク洪水被害者支援ネットワーク（後モザンビークネット）設立
  - 日本援助農薬放置問題のためのアドボカシー活動開始、2KRネット設立
- 2004年～　東京での教職時代
  - TICAD市民社会フォーラム設置
  - アフリカ大学との留学促進、学内アフリカ・コース設置準備
- 2011年3月11日後
  - 福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト（FnnnP）設立
  - プロサバンナ問題への取り組み
  - カフェ・モサンビコ・プロジェクト開始

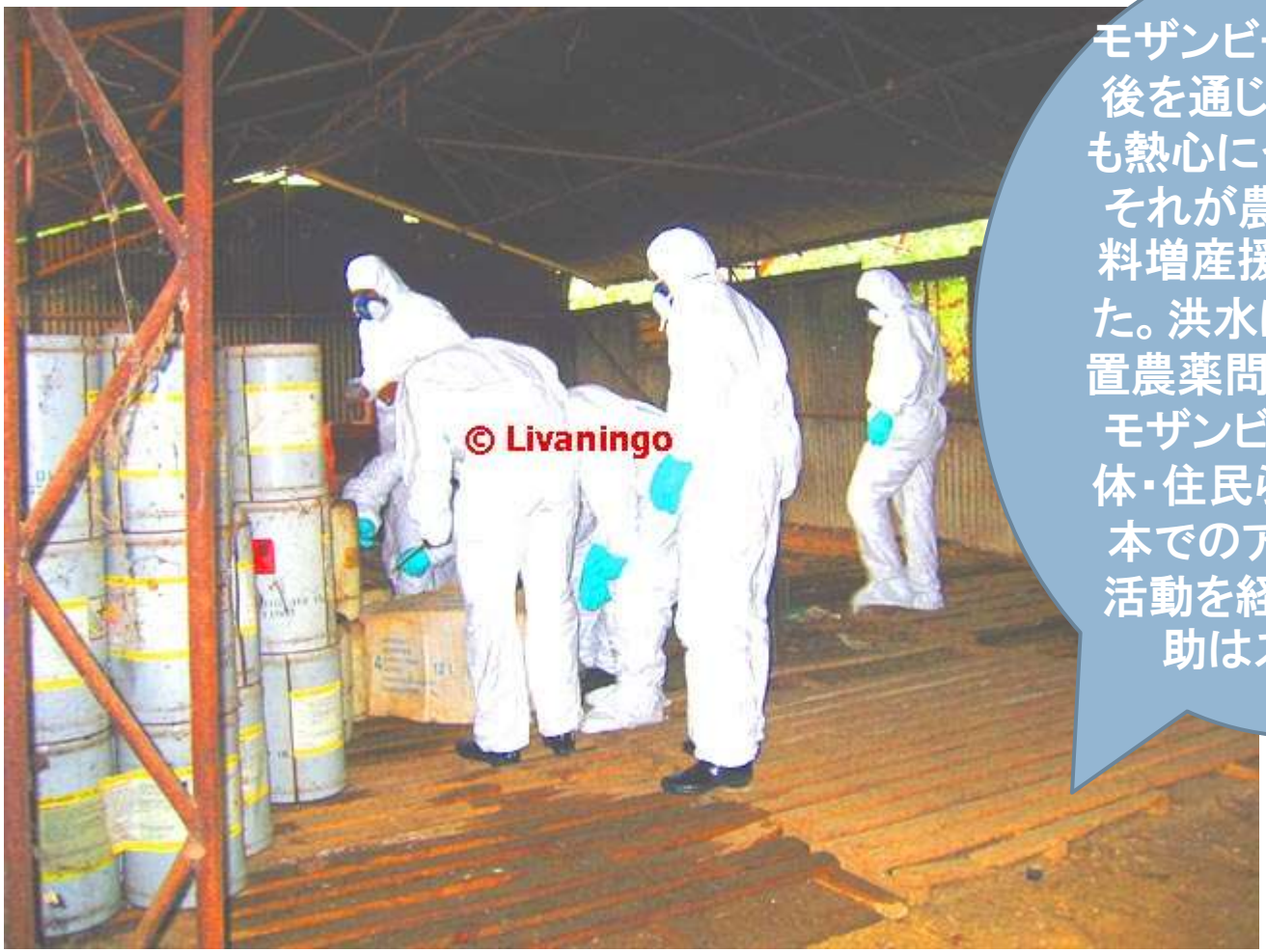
日本における政府開発援助の推移

- WWII後：アジアへの戦後賠償として始まった＋海外の日本人/日系移民支援としての側面
- 1990年まで：政府中心、二国間、インフラ、モノ中心
- 1990年以降：世界を意識
  - NGO・NPOの登場
  - 国連平和維持活動、緊急人道援助が焦点化
- 1990年後半：従来援助の行き詰まり、転換
  - 政権交代、NPO法
  - 援助での問題の表面化（ダム、債務）
- 2000年～：地球規模課題、世界構造転換、経済至上主義
  - MDGs
  - 援助力点アフリカへ
  - Win-Win/官民連携/BoP/南南協力/三角協力


AFRICAN ISSUES
MOZAMBIQUE &
THE GREAT FLOOD OF 2000
Frances Christie & Joseph Hanlon

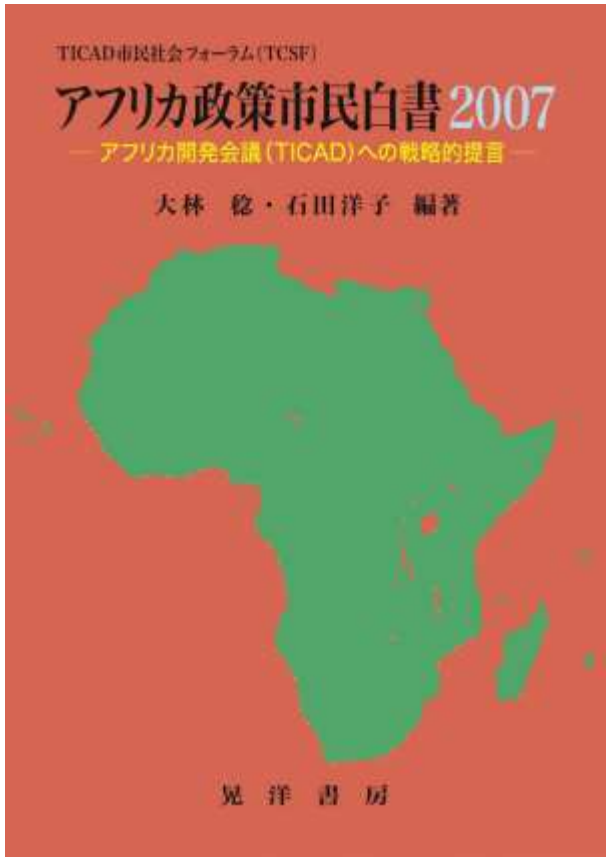
care

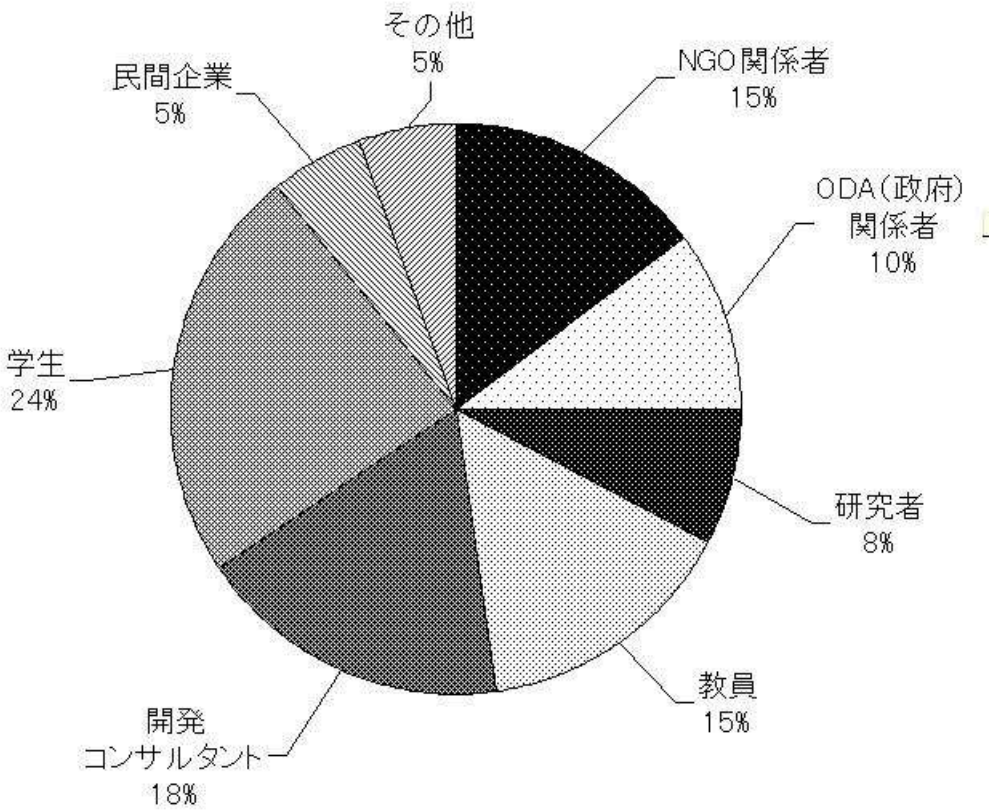
モザンビーク中で見つかった放置・期限切れ農薬（日本のODA供与）



モザンビーク紛争時・後を通じて日本が最も熱心にやった援助、それが農薬援助（食料増産援助2LR）だった。洪水に際して、放置農薬問題が発覚し、モザンビーク環境団体・住民らの運動、日本でのアドボカシー活動を経て、農薬援助はストップ。

批判ばかりしてるわけではなく…





マルチ・ステークホルダーが参加する
TICAD市民社会フォーラムの挑戦

TICAD IVに向けた市民社会会議
～外務省とJICAとの協力～

TICAD閣僚会議サイドイベント

JICAによるアフリカNGO政策協議

ただし、その前提は、
・アフリカの未来はアフリカの人びとのもの
・アフリカの社会はアフリカの人びとのもの
・その人びとが中心の開発や援助を実現しよう

私にとっての「国際協力」～なぜ、どう取り組むのか？

- あたり前の世界の一員として
  - なぜ「日本」「日本人」か否か、と分けるのか？
- 世界から学び、自分の足元をふり返るために
  - もっとも矛盾が現れているから問題があり、その問題を体感し、知り、理解することが、この世界の成り立ち、自分の位置、それらを包含する構造を示してくれるから
- 問題を乗り越える叡智が凝縮されているから
  - 矛盾にこそ問題の本質は現れ、それに直面してもがく人びとの声・生き様にこそ、問題の乗り越えの可能性が示されるから
- どう生きるのか、だから何をやっていくべきかの道標
  - 身近ゆえに見落としがちな点を、日本との往復運動の中で思考し行動するから

私にとっての「国際協力」～何を、どうやるのか？

- ビジョン：よりよい世界の創造
- ミッション：その一員として果たすべきことに取り組む
- 誰として？：人、女、母、市民、納税者、教育者、研究者、大学人、etc
- 人生で何をすべきか？：
  - 今必要とされているのに誰もやらないことに取り組む
    - 緊急活動をすること
  - その構造を理解し構造転換に関わる
    - 長期的な視点に立ってすること
    - アドボカシーをすること
    - 市民社会と共に汗をかくこと
    - 若者を育てること
  - いずれも仲間とともに行うこと
    - 活動自体が社会変革のプロセスであること
    - だから発信すること

ただし、このどれもが国内でも同じ話。
例）福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクトの活動から

「国際」＋「協力」に分ける意義の再考が必要では？

私にとっての「国際協力」～だから、結論。

- 私はもはや・・・
  - 「ボランティア」という言葉を使わない
    - 「やってあげる」というニュアンスがあるから
    - 市民として当然のことをしているから
  - 「支援」という言葉も使わない
    - 相手を「対象」として客体化したくないから
    - 本当のところは分からないから
  - 「助けよう」とも思わない
    - お互いさまだから
  - 「政府＝公」と思わない
    - 現実には「政府＝利権」の場合が多いから
    - 市民も「公」を担っている
  - 「win-win」という言葉は使わない
    - Loserがいるから
  - 貧困者をpoorと呼ばない
    - Deprived、underprivilegedと呼ぶ

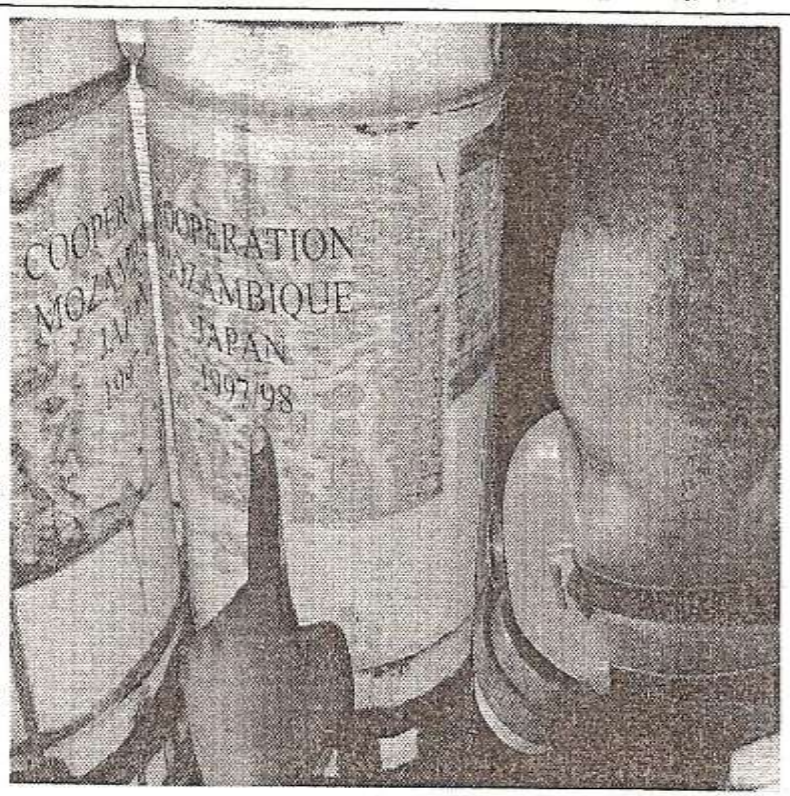
「何故？」と思う人には、東日本大震災の被災地の住民や原発事故からの避難者として、左記の言葉をイメージしてほしい。

プロサバンナ問題に関わる理由

- 立案段階での反対：モザンビーク北部の人びとの営み、北部の環境、日本の援助のキャパに不釣り合い、問題のあるフレーム
- 失われた対話の機会
- 2011年：現地他ドナーたちからの問題提起
- 2012年夏：現地モザンビーク市民社会からの強い懸念表明

モザンビーク農民・市民社会から見た日本・その援助 （2002年～聞き取り）

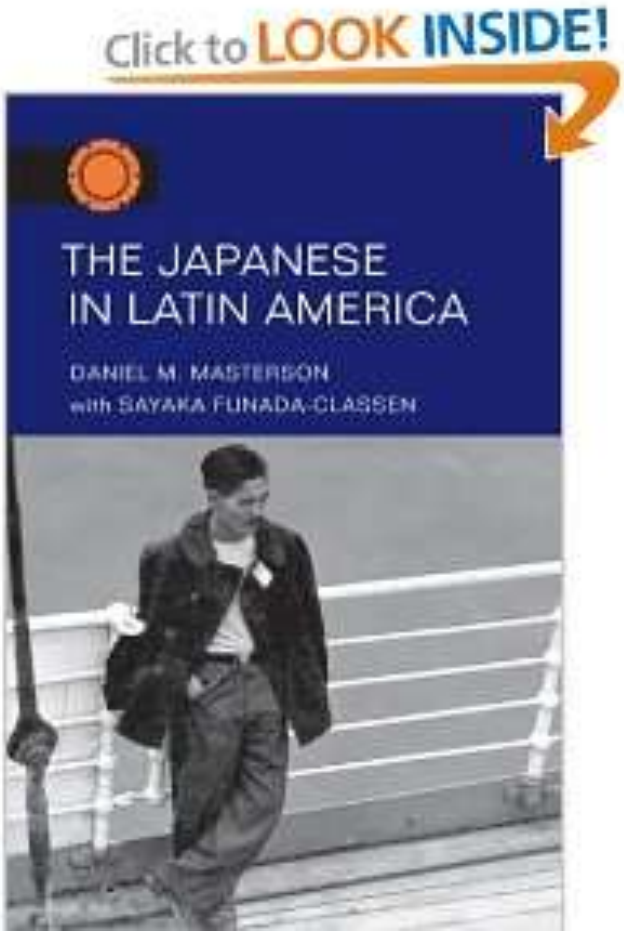
- モノ（農薬等）の供与に偏っていた
- 歴史が浅い
- 現場（モザンビーク、地域社会）を知らない
- ポルトガル語が話せない
- 現場（コミュニティ）に来ない、来ても短期間
- 継続性がない
- アカウンタビリティ・透明性が低い
- 市民社会を無視している

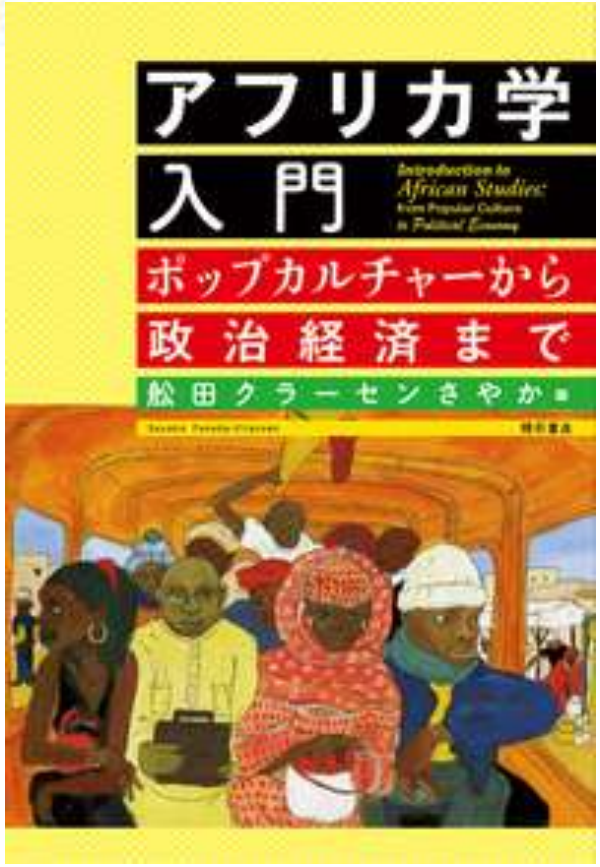


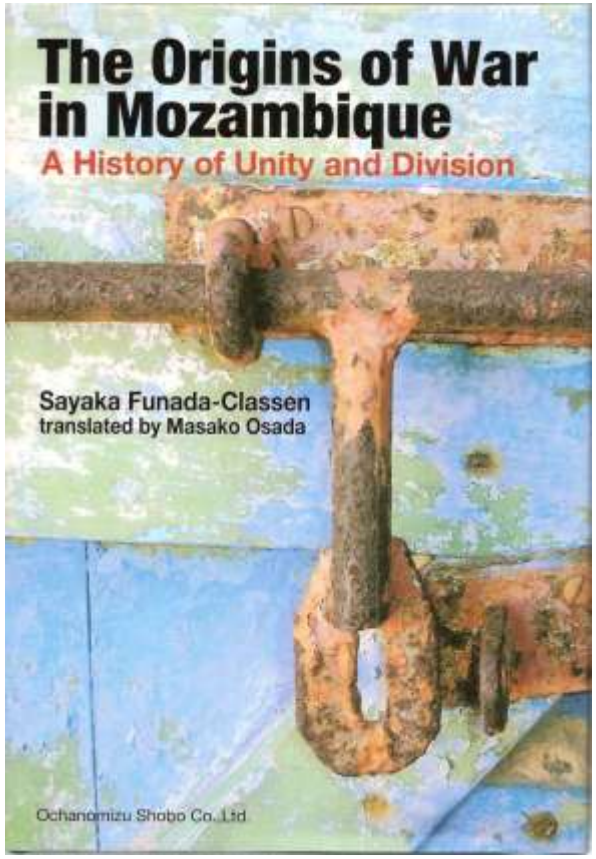
モザンビーク中部ベイラの倉庫に放置されている日本が供与した農薬（共同）

現地の声：今回、また問題を起こしている「失敗」の継承はないのか？

問題に取り組む際に・・・
誰としてやるのか？







構成

1. プロサバンナとは何か？（JICAの説明）
2. モザンビーク農民・市民社会の声
3. 以上のギャップの背景分析
4. 21世紀を迎え、未来に向けて

プロサバンナとは何か？

JICAの説明より

プロサバンナとは？
～公式まとめ～

- 「ブラジルはかつて広大な未開墾の熱帯サバンナ地帯を有しており、1970 年代から、機構（JICA）を含む日本の協力により、セラード地帯の農業開発を進めてきた実績がある。他方、ブラジルは長年にわたる日本の技術協力の成果を踏まえて、同じポルトガル語圏に対する南南協力・三角協力の推進を目指した『日本・ブラジルパートナーシッププログラム（JBPP）』を締結している。本事業は、上記枠組みの下で、ブラジルのセラード地帯開発で得た知見をいかして、モザンビークの熱帯サバンナ地帯の農業開発への貢献を図っている（JICA, 2012②:94）。」

JICA広報

- ブラジル内陸部に位置する広大な熱帯サバンナ地帯（日本の国土の5.5倍）をブラジル政府と協力、一大穀倉地帯に変貌させたJICAのセラード農業開発プログラムは、日本のODA事業の中でも極めて規模の大きな事業だ。また、世界の食料供給基地をアメリカとブラジルの二極化することに貢献した。
- この貴重な経験を食料不足に悩むアフリカで活用することを目的に、日本とブラジル両国が協力して「アフリカ熱帯サバンナ農業開発協力」への取り組みが検討されている。アフリカには地球上の熱帯サバンナの5割が集中し、広大な未利用農業適地が存在する。2009年4月3日、ブラジルを訪問した大島賢三JICA副理事長はブラジル国際協力庁長官との間で、アフリカ熱帯サバンナ農業開発協力を進めていくことで合意した。
- （http://www.jica.go.jp/story/interview/interview_75.html）

先行する喧伝
～JICA・外務省による広報活動～

- 2011年末の国際会議「第4 回援助効果向上のためのハイレベル・フォーラム（HLF4）」（於釜山）で、
  - 「南南協力・三角協力のパイオニアとしての日本の地位が国際社会で広く評価されていることが、会合でも確認された」
  - 米国クリントン国務長官が、「有効な南南協力の事例」としてプロサバンナ事業を紹介(JICA, 2012①:19)。
- 2012年6月13日のUNDP公開シンポジウム「TICAD Vに向けて～アフリカ開発の課題と可能性」（主催：UNDP）での、JICAアフリカ部長並びに外務省アフリカ審議官による重複報告。

2012年11月15日JICA担当者の説明

- ProSAVANA対象地域であるナカラ回廊はブラジルのセラード地域と緯度が近く、南緯13度から17度の間にある。植生が似通っているように自然環境は類似点が多い。

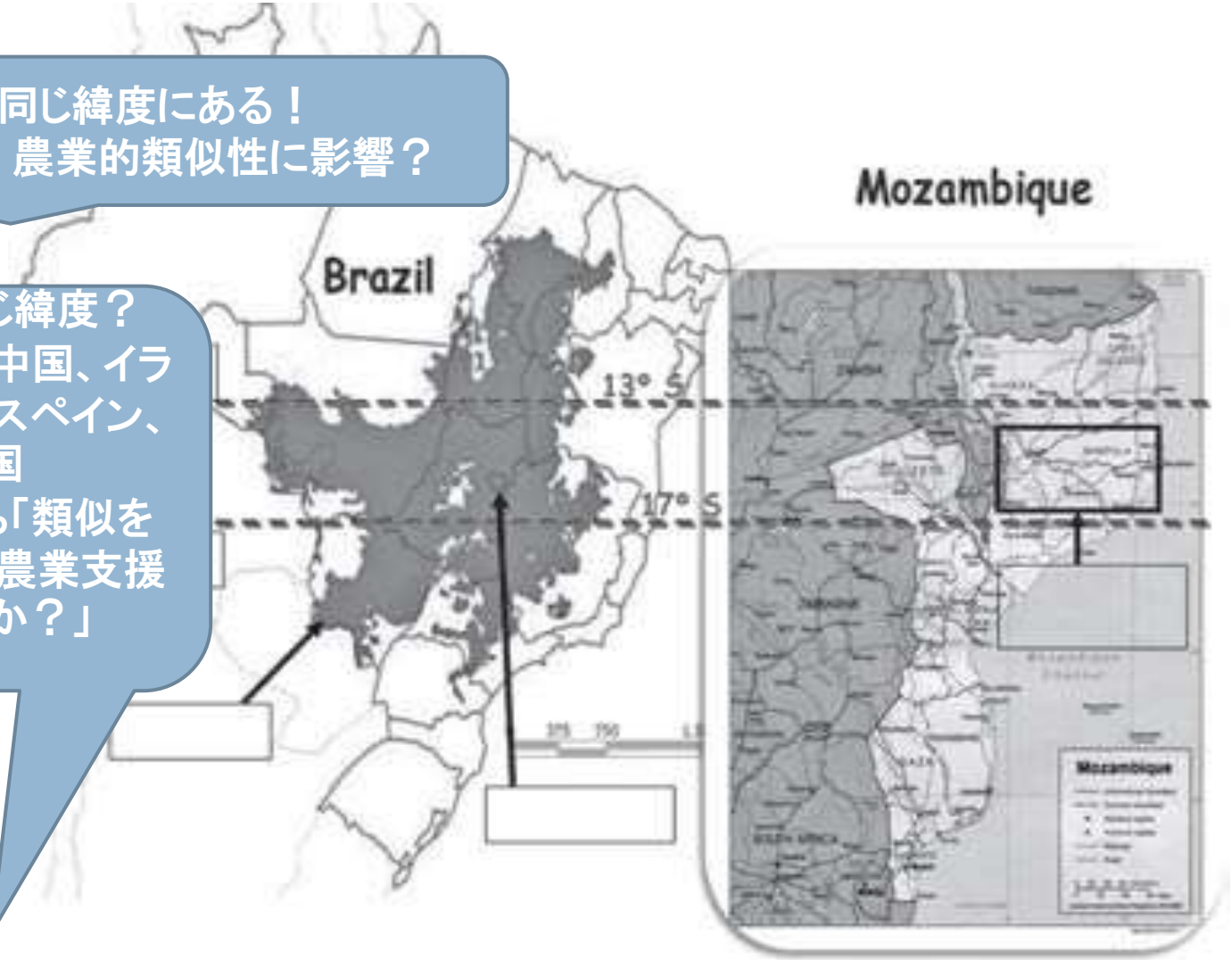
＜＝2010年頃に付け加えられた点

  - 社会・経済環境は大きくことなるため、ブラジルでのセラード開発事業をそのままモザンビークで行うことはできない。セラード開発事業のモデルを上手に使ってモザンビークでの事業を行おうと考えた。

セラードとモザンビーク北部類似性

同じ緯度にある！
しかし、農業的類似性に影響？

日本と同じ緯度？
朝鮮半島、中国、イラン、トルコ、スペイン、米国
＜＝だから「類似を前提にした農業支援をするか？」



2012年11月15日JICA担当者の説明

- モザンビークは人口の8割が農民。そのうちの96％は小規模農家で自給自足型の農業を営んでいる。低投入・低生産型の農業である。他方、ナカラ回廊地域は広大な農耕可能地に恵まれており、その多くは未開墾地だとされている。移動農業を含めた伝統的農業に限定されており、自給作物、商業作物ともに生産性が低い点が課題である。

＜＝2010年頃付け加えられた点

2012年11月15日JICA担当者の説明

- 農業生産拡大のポテンシャルが高いものの、これまで進んでいなかったナカラ回廊地域の農業開発を進めることで、
- 小規模農家の貧困削減と食料安全保障に貢献していきたい。
- そして、経済成長に貢献する農業の展開可能性を見込んでいく。
- 一方で、JICAが伝統的に行ってきている小規模農家の支援、貧困削減をステップアップさせ、中核農家を作っていき、市場志向型のアプローチも考えていく。

＜＝聞こえは素晴らしいものの…。

＜＝問題探しをしてみよう。

ProSAVANAにおける3国の関係

- 日本・・・食料安全保障への貢献、国際貢献による国際的地位の向上、民間企業との連携
- ブラジル・・・日本に同じ
- モザンビーク・・・貧困削減、雇用機会の創出、適切な投資の受け入れを通じた外貨の獲得、産業振興を通じた税収増

↓

2国間関係、3国間関係が着実に進展する、WinWinWinの三角協力となっている。

JICAのヴィジョンとミッション

- ビジョン
  - かつて→「人間中心の開発」
  - 今→「すべての人びとが恩恵を受けるダイナミックな開発促進」
    http://www.jica.go.jp/about/vision/index.html

- 使命
  1. グローバル化に伴う課題への対応
  2. 公正な成長と貧困削減
  3. ガバナンスの改善
  4. 人間の安全保障の実現

JICAの活動指針

1. 統合効果の発揮
2. 現場主義を通じて複雑・困難な課題に機動的に対応開発途上国の人々の目線でニーズを的確に把握し、現場中心の事業展開を図ることによって、複雑・困難な開発課題に機動的に対応します。
3. 専門性の涵養と発揮国際協力の専門集団として、現場から得られた経験や知見を生かした専門性と発信力を発揮して、多様な開発課題に迅速かつ的確に対応します。
4. 効率的かつ透明性の高い業務運営効率的で透明性の高い業務の運営と評価を通じて、不断の自己革新と合理化に取り組み、説明責任を果たします。

モザンビーク市民社会の批判

●2012年10月11日、世界を駆け巡ったモザンビーク最大で最古の農民組織UNAC（全国農民組織）によるProSAVANA批判声明。

＊配布資料をご覧ください

UNACの抗議の要点

- そこに暮らし、耕す農民の主権を無視して計画され、実施されている（トップダウン）
- ブラジルやその他のアグリビジネスによる土地奪取の危険性を促進する事業である
- 森林破壊・遺伝子組み換え種の導入への危惧

「私たちは絶対土地を手放さない」

立ち上がるモザンビーク市民社会

- 12月12日首都(マプート)でモザンビーク市民団体・35団体が加盟するROSA(Network of Organisations for Food Sovereignty「食料主権のためのNGOネットワーク」)がプロサバンナMTG。
- その結果:
  - 「ある一部の団体だけがプロサバンナを問題視しているのではない。我々は一致して、プロサバンナを大変憂慮している」
  - 「市民社会との相互的なコミュニケーションもなければ、市民社会の関与を可能にするプロセスもない。このような手法、市民社会とのコンスルテーションがないプロジェクトを問題と考え、批判する」

モザンビーク農民連合、環境団体、市民社会団体の批判ポイント

1. 主権在民の原則無視・非民主主義的プロセス、アカウンタビリティの欠落
2. 土地の収奪、農民に保障されているはずの土地の権利の問題
3. 農民の生産努力の無視・無知
4. 森林伐採、化学肥料・農薬の多用やモノカルチャー奨励等による環境問題
5. 輸出のための農業投資により、モザンビーク全体、リージョン、ローカルの人びとの食料生産を犠牲にし、食料安全保障にダメージを及ぼす問題

プロサバンナに関する分析

JICAの説明とモザンビーク市民社会の間の大きなギャップ

公的には語られないが、資料分析からみえてきた点

1. **現地農民のニーズから立てられたものではなく、政治案件である**
   - 「3か国のトップレベルの政治家が関与する」
   - 日本関係者の間では「麻生案件」といわれている
2. **日本ブラジルのパートナーシップが主軸、モザンビークは対象**
   - JICA資料・説明会の全てでセラードが発表の2分1以上を占める
3. **ブラジルのアグリビジネスの土地奪取**
4. **森林破壊の言及なし**
5. **急速に高まる現地での反ブラジル感情**
   - ナカラ回廊プロジェクトに関わるブラジルの鉱山会社 Valeによる土地奪取への住民反対運動

分析手法

- 歴史学・地域研究手法を使った一次・二次資料に基づく実証分析

■一次資料

- 文献資料
  - JICA 12点
  - JETRO1点
  - 外務省2点
  - 現地市民団体資料(声明・報告書)5点
- 現地聞き取り調査
  - 現地農民
  - 農民団体、市民社会団体
- 追加聞き取り調査
  - 農民団体、市民社会団体

■二次資料

- 先行文献　10点
- 報道でのインタビュー
  - 日本メディア　6点
  - 国際メディア　2点
  - ブラジルメディア　3点

年月	場所	出来事
2000年3月	東京	三角協力の政府間枠組み「日本・ブラジルパートナーシッププログラム（JBPP）」合意文書署名（飯村外務省経済協力局長、ドゥトラ（伯）ABC長官）
2005年5月26～28日	東京	小泉総理とルーラ大統領会談
2007年4月	ブラジル	緒方貞子JICA理事長・アモリン（伯）外相会談 JBPP推進合意
2007年8月16～19日	ブラジル	麻生外務大臣ブラジル訪問、アモリン外相との間で「戦略的パートナーシップ再活性化」確認
2008年	日伯	日伯交流年
2009年9月17日	マプ-ト	JICA大島賢三副理事長、ファラーニ（伯）国際協力庁長官、ニャッカ（モ）農業大臣「熱帯サバンナ農業開発」合意文書署名
2009年9月～2010年3月	モザンビーク	「日本・ブラジル・モザンビーク三角協力による熱帯サバンナ農業開発プログラム」準備調査
2010年10月29日	ブラジリア	「日本・ブラジル・パートナシッププログラム10周年・三角協力」
2010年11月9日	モザンビーク	シルヴァ（伯）大統領のモザンビーク訪問

ブラジル企業による土地奪取

- ニシモリ連邦下院議員：「我々は農業者の入植をしっかりバックアップしていきたい」（ブラジル・ニッケイ新聞2012年5月1日）
- オーガスティン・マトグロッソ州綿花協会会長：「ブラジルでは価格が高く環境に関する規制が多いことから農地取得のリスクが高く、モザンビークの土地の価格は無視できない」（ロイター通信2011年）
  - ブラジル土地価格の1666分の1～238分の1
  - 緩い環境規制（森林伐採、水資源）、緩い市民社会の監視

- つまり、ブラジル企業にとってプロサバンナ事業は、「容易な大規模農地取得を有利にする事業」として認識されている
- JICAの資料にはまったく出てこないブラジル・アグリビジネスの野心（広大な土地の収用）
- この点に関する日本NGO・No!toLandGrab,Japanの公開質問状への回答の曖昧さ（配布資料）

なぜこのような話が出てくるのか？

- 2007ー8年の食料価格高騰による食料危機：
  - 食料投機、気候変動、中国インドの急成長と需要拡大（輸出国から輸入国へ）
- 世界での土地奪取Land-grabbing/land rush
- それを規制するようにみせてその実推進してしまった世銀などによる「7つの原則」
- ターゲットとなった「熱帯サバンナ」地域
  - その7割はアフリカに
  - セラードは熱帯サバンナとされる
  - プロサバンナの別名：「熱帯アフリカ地域における農業開発プログラム」

第一フェーズから第二への変化
～モザンビーク北部に関して

- 「不毛の大地セラード」との共通性の強調

→実態としての違いの大きさへの気づき（2010年）

- 「豊かなのに活用されていない」
  - 「低投入・低生産性の自給自足型農業を余儀なくされ、貧困に苦しんでいます」
- 「未耕地が多い」
  - 「農耕可能地は3600万haであるが、実際耕作されている面積は約16％の570万haにすぎない」
- 「場所によっては人口密度が高くまとまった土地を確保するのは困難」

熱帯サバンナ地域とは何か？

皆さんのアフリカのイメージ

熱帯サバンナとは？

- 「サバンナ」と聞くと皆さんのイメージは？
  - 「サバンナ」を検索すると？
- しかし、「熱帯サバンナ」は、皆さんがイメージする植生のことではありません。
- 「熱帯サバンナ（Tropical Savannah)」：19世紀末ロシア気象学者による命名。
  - 明確な乾季と雨季。降雨量

→ここから農適地とされる⇔「セラード＝不毛」の謎

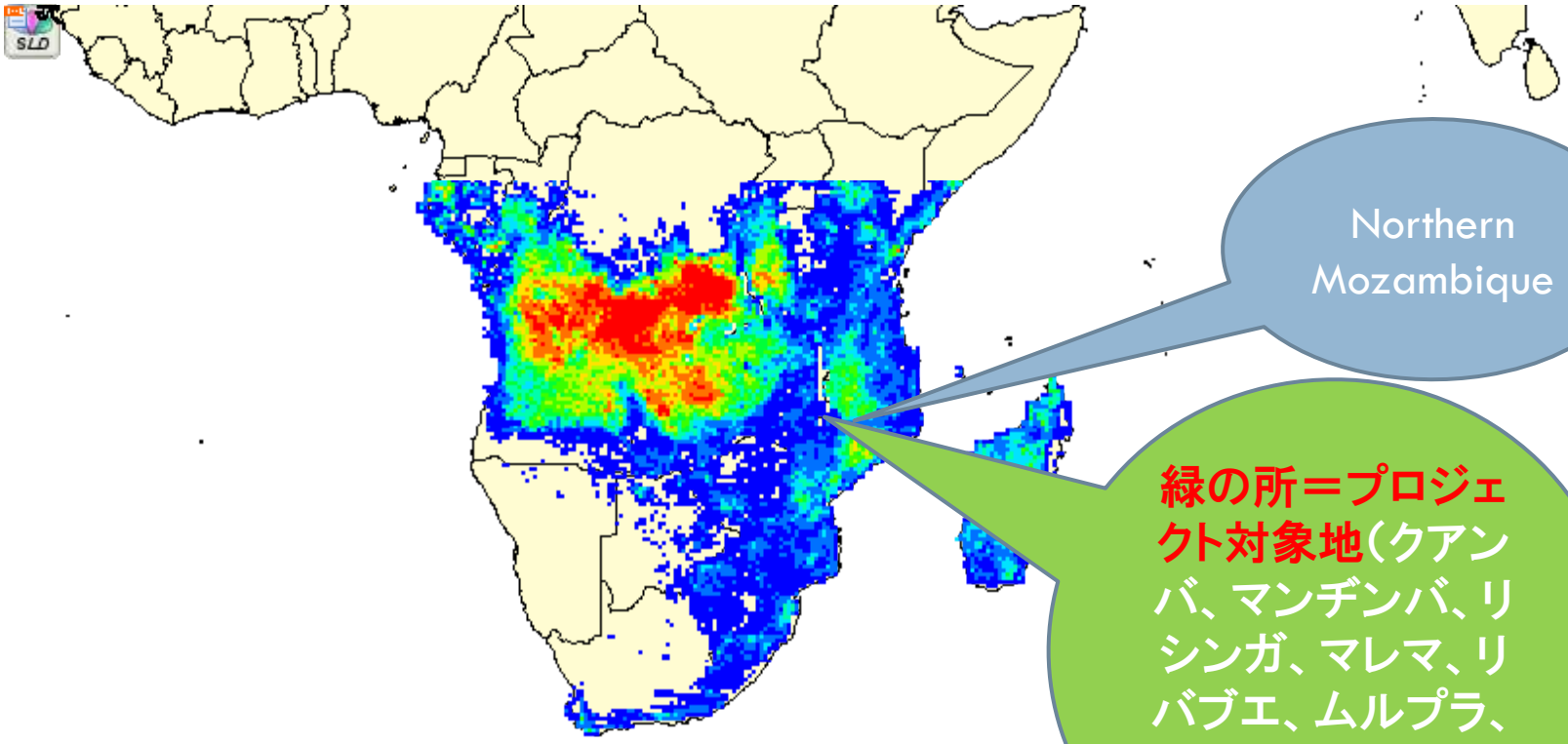
つまり、植生/イメージとは関係ない分類

熱帯サバンナ≠サバンナ

- 植生に基づいた、一般的な「サバンナ」とは？
  - Wood(y)サバンナ（林）
  - Grassサバンナ（草原）
- アフリカではどちらが多い？
- モザンビークでは？
- モザンビーク北部では？

Woody Savannah in Africa (Percentage 0-100)

Land coverage: red-green-light blue-dark blue

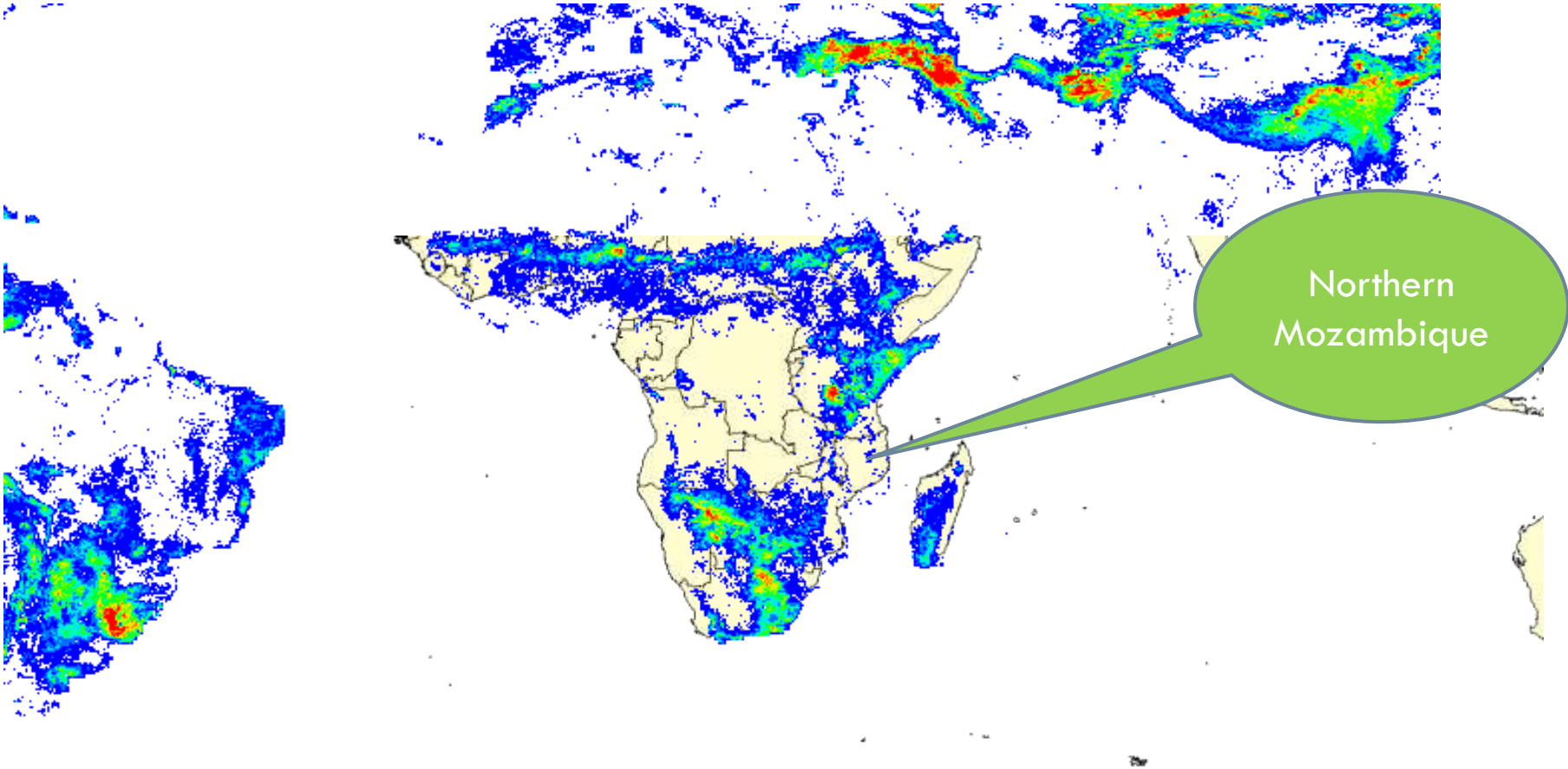


Northern Mozambique

緑の所＝プロジェクト対象地（クアンバ、マンヂンバ、リシンガ、マレマ、リバブエ、ムルプラ、グルエ、アルトモロクエ）

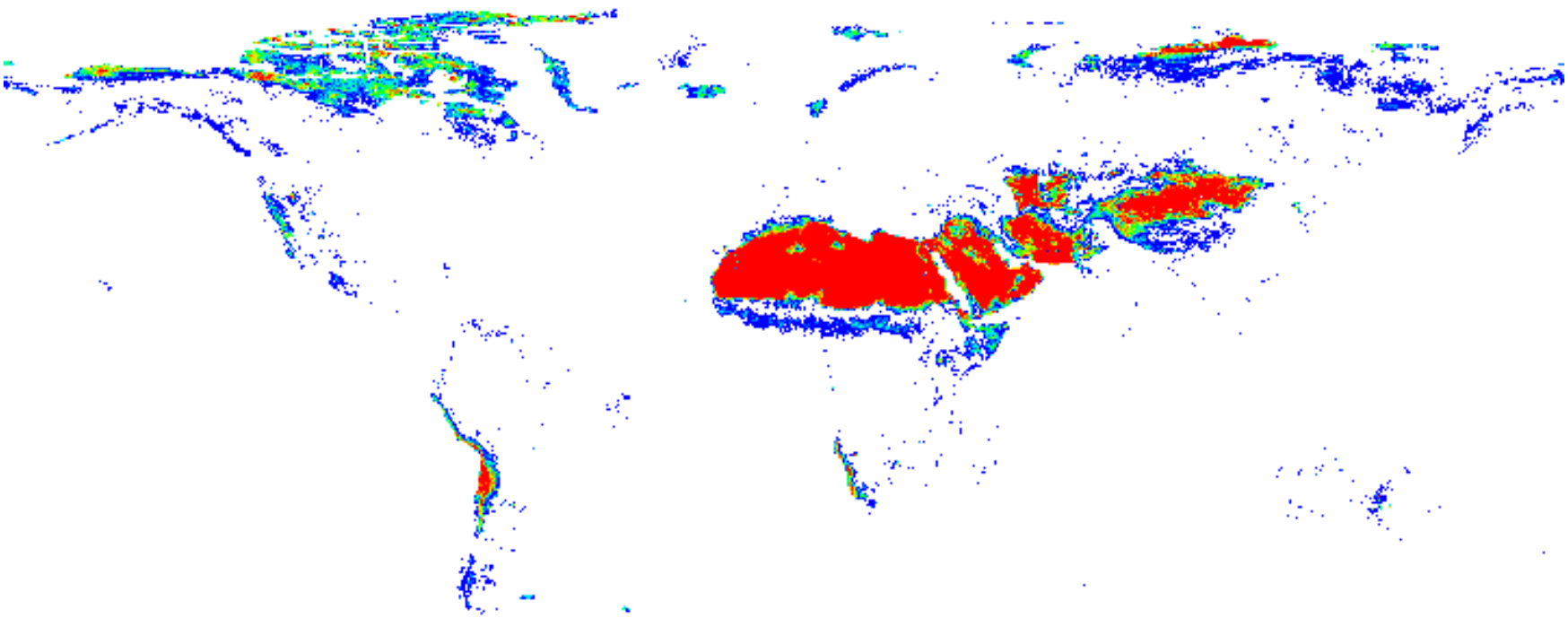
Distributed Active Archive Center for Biogeochemical Dynamics
http://webmap.ornl.gov/wcsdown/wcsdown.jsp?dg_id=10011_9

Grasslands (Percentage 0-100)



http://webmap.ornl.gov/wcsdown/wcsdown.jsp?dg_id=10011_11

Barren or Sparsely Vegetated (Percentage 0-100)



http://webmap.ornl.gov/wcsdown/wcsdown.jsp?dg_id=10011_17

つまり、
アフリカには、
「不毛の地」はなく、
WOODYサバンナ＞草原サバンナ

特に、モザンビーク北部には、
「不毛の地」はなく、
GRASSサバンナもほとんどなく、
モザンビーク中で唯一WOODY
サバンナが色濃く残る地域

典型的なニアサの植生

典型的なニアサの風景

モザン関係者なら誰もが知ってる北部の農的特徴

- 豊かな大地と森林
  - 最後の自然
- データ：人口密度、農業生産高
  - 全国一
  - 土壌・水の豊かさ、住民の農業への熱意
- 歴史：
  - プランテーション栽培の失敗から小農生産の重視
  - 小農生産で支えられてきた家族・ローカル・リージョナル・ナショナル・国境を超えた食料生産
  - それを担ってきた女性

北部女性たち（農業）

北部女性たち（食）

食事に関係することは女性の仕事

北部地域の現在の課題

- 外資による急速な土地奪取
  - 大豆、植林
  - 「村の代表」の一本釣りによる村内政治の激変
  - 住民との衝突
- モノカルチャー生産による急速な環境破壊と社会変化
  - 特にタバコ栽培
  - 男性と女性のジェンダー関係の変化
    - 酒・売春に消える金
    - 女性への暴力、一夫三妻、女性の早婚
    - 儲けられないお年寄りのニグレクト

社会関係の激変、コミュニティの急速な崩壊

セラード開発の後のセラード

- ブラジル研究の第一人者堀坂浩太郎氏
  - 「地平線まで一直線に切り拓かれた国道、戦車のようなブルドーザーで根こそぎ灌木をなぎ倒すセラードの農地造成（堀坂、2012：47）」
- アフリカ中ですでに起きつつある現象
  - 外資の導入によるもの
  - 換金作物の契約栽培による小農自身によるもの

世界における土地奪取
Land-grabbing

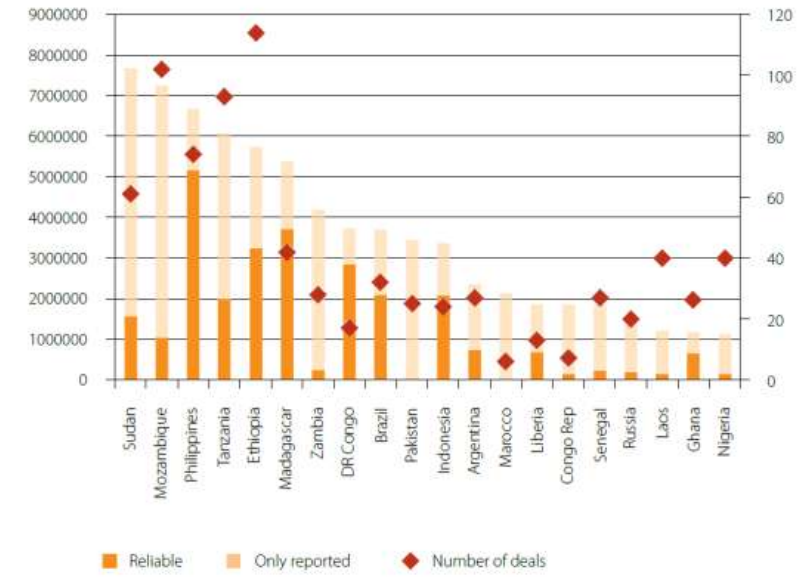
わかっているだけで、

- 世界の土地奪取の6割がアフリカで発生
- アフリカ大陸の5%の土地(ケニア相当)が既に奪取されている
- アフリカ各地で暴動が起きている
  - マダガスカル
  - ウガンダ
  - タンザニア
  - ・・・モザンビーク

LandMatrix 2012
http://landportal.info/landmatrix/get-the-detail

世界で二番目に土地が狙われてきたモザンビーク

- モザンビークだけの問題ではない。
- 世界中の土地が狙われている
- 特にアフリカ（全体の60%）
  - 政府が強権で容易
  - 農民の権利が弱い/環境規制が緩い
  - 食料生産・貧困削減の名の下に農村への投資が正当化
- モザンビークが急速に注目：世界の二番目の取引面積・件数
  - 土地が広く、水が豊富
  - ここ数年の民主化の停滞



Source: Authors' calculations based on Land Matrix data.

アフリカ中で抗議を上げ始めた農民

■セネガル、マリでの抗議
■ウガンダ、タンザニア、マダガスカルでも大規模抗議発生

国連食料主権ラポターによる世銀「責任ある農業投資原則」批判

- 「長年にわたる慣習的な権利に基づいて生活を支えるために利用されてきた土地が、『遊休地』あるいは『農業のための未利用地』と認識され、こうした取引の対象として操作されることが多い。（中略）しかも、これらの諸原則は自発的な履行が求められるに過ぎない。しかし、各国政府が完全な履行を何より求められているのは、全ての人の権利遵守のための責務を完全に果たすことであり、この権利には、食の権利や自然の富や資源からの利便と生存の糧を奪われない権利が含まれる。以上の諸原則が人権を無視していることに示されているように、アカウンタビリティを欠いている（de Shutter 2010; 2012）。」

アフリカ各地で起きていること

- インド・ネルー大学ジャヤティ・ゴシ（Jayati Ghosi）教授（経済学）：インド企業のエチオピアやソマリアの農業分野への直接投資、広大な土地の貸与について
  - 「インドでは到底許されない広大な土地や水資源の取得が、アフリカでは可能になっている。インドで出来ない理由は、農民や市民が黙っていないから。（中略）これは国際連帯の話ではない。インド企業はアフリカで新植民地主義者のように振る舞っている。」

私たちの社会はどうなのか？

ガバナンスは？

民主主義は？

市民社会は？

住民の主権は？

権利は？

踏み躙られていても気づかない日本の私たち

声をあげ始めた、アフリカ農民の方が先進的なのではないか？

結論

援助は日本社会の鏡。
私たちは日本社会の問題を輸出している。
だから？？？

アフリカから学ぶ
「アフリカのことはアフリカ人に聞く」

南部アフリカ開発共同体（SADC）
大使連続セミナー
南アフリカ大使によるジェンダーに関する講演
（2012年11月8日　於：東京外国語大学）

レソト王国に留学中の学生
（2012年5月）

アフリカの人たちの未来
連帯だけが答え

ルワンダのコーヒー企業でインターンする学生 （2011年）

モザンビークの大学の先生と学生と一緒に地域の女性に配布するための苗作りに取り組む留学生（2012年）

カフェ・モサンビコ・プロジェクト

そんな私が考える新しい試みについては、
「カフェ・モサンビコ・プロジェクト」
を検索ください。

ご静聴ありがとうございました。

過去の失敗から学ばず、
人びとのニーズから立ち上げずに、
机や頭の中で勝手に練られた、
このような援助事業。
311後の日本で、
財政的にも、社会的にも、心理的にも、
やる余裕などどこにもない。

「成功」「驕り」が、このようなことを生み出
目的なき援助事業の、
あるべき迷走ぶり。
もはや21世紀。
軍事政権時代のブラジルにおける70ー
ない。

アフリカも、また、変貌している。
もしかして、変わらないのは、
日本の援助関係者のメンタリティなのか

文献一覧

- 1. 一次資料
- ■JICA、JETR、外務省
- JICA トピックス 2009年5月25日「アフリカ熱帯サバンナの持続的農業開発を目指す（ブラジル）」（http://www.jica.go.jp/topics/2009/20090525_01.html）
- JICA ストーリー インタビュー、2009年6月30日 「熱帯サバンナ開発にみる食料安全保障」（http://www.jica.go.jp/story/interview/interview_75.html）
- JICA トピックス 2009年9月28日「日本とブラジルがモザンビークで農業開発協力ーブラジル・セラード農業開発の知見を生かして」（http://www.jica.go.jp/topics/2009/20090928_01.html）
- JICA トピックス 2009年12月3日 「ブラジルからモザンビークへ、保健人材育成への協力—日系ブラジル人第三国長期専門家を派遣」（http://www.jica.go.jp/topics/2009/20091203_01.html）
- JICAプレスリリース、2010年3月11日 「モザンビーク国向け円借款契約の調印ー道路、港、産業というナカラ地域の総合的開発を目指し、まずは道路整備により地域の経済発展の基礎を築く」（http://www.jica.go.jp/press/2009/20100311_02.html）
- JICA World「途上国の農業開発なしに 維持できない日本人の食生活」*JICA World*、2010年5月15（
- http://www.jica.go.jp/publication/j-world/1005/pdf/tokushu_04.pdf）
- JICAトピックス 2010年11月24日「日本・ブラジル グローバル・パートナー宣言ーJBPP10周年・三角協力25周年記念式典」（http://www.jica.go.jp/topics/2010/20101124_02.html
- JICA ウェブページ プロジェクト概要「ナカラ回廊農業開発研究・技術移転能力向上プロジェクト」実施合意2011年2月21日（http://www.jica.go.jp/project/mozambique/001/outline/index.html）
- JICA トピックス 2012年5月14日「日本、ブラジル、モザンビークで官民合同ミッションーナカラ回廊への農業投資促進を目指す」（http://www.jica.go.jp/topics/2012/20120514_02.html）
- JICA『平成23 年度 業務実績報告書』2012年6月①
- JICA『第2 期中期目標期間 事業報告書』2012年6月②
- JICA「第5回 モザンビーク北部農業セミナー」配布資料 2012年7月31日
- JETRO レポート 2012年8月21日「【ブラジル】農業の三角協力でアフリカに参入」 http://www.jetro.go.jp/world/cs_america/reports/07001048
- 外務省「責任ある農業投資の促進に向けたけた我が国の取組」平成22年4月 外務省経済安全保障課（http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/food_security/pdfs/besshi1.pdf

- ■その他
- 窪田博之(2010)「国際農林業協力の新たなるパートナー　―農業分野における南南協力の可能性―」、『国際農林業協力』2010年vol.33 no.3、2ー8.
- 本郷豊(2010)「日・ブラジル連携対アフリカ熱帯サバンナ農業開発協力事業(ProSAVANA)―ブラジルの「農業革命」をアフリカ熱帯サバンナに移転する―」、『国際農林業協力』2010年vol.33 no.3、9ー19.
- No!toLandGrab, Japan「JICA モザンビーク案件に関する質問書への回答」2012年1月5日(http://landgrab-japan.blogspot.jp/2012/01/jica.html)
- de Schutter, Olivier(2010) "Destroying the World's Peasantry", *Project Syndicate*, Jun. 4, 2010 (http://www.project-syndicate.org/commentary/responsibly-destroying-the-world-s-peasantry)
- ----------(2012)"Underwriting the Poor", *Project Syndicate*, 06 June 2012 (http://www.project-syndicate.org/print/underwriting-the-poor)
- FOEI (2012) *Land, life and justice: How land grabbing in Uganda is affecting the environment, livelihoods and food sovereignty of communities*, FOEI.
- Schlesinger, Sérgio/FASE (2012) *Cooperação e Investimentos Internacionais do Brasil: a internacionalização do etanol e do biodiesel*, FASE. (http://www.fase.org.br/v2/pagina.php?id=3758)
- WB (2009) *Awakening Africa's Sleeping Giant: Prospects for Commercial Agriculture in the Guinea Savannah Zone and Beyond*, Washington DC: The World Bank.
- WB/Deininger, Klaus and Byerlee, Derek, with Lindsay, Jonathan, et.al. (2010) "Rising Global Interest in Farmland: Can It Yield Sustainable and Equitable Benefits?", Washington DC: The World Bank. (http://siteresources.worldbank.org/INTARD/Resources/ESW_Sept7_final_final.pdf)

- **■報道・新聞（日本・ブラジル）**
- ニッケイ新聞（ブラジル）2012年5月1日「日伯両国が連携し、モザンビークのサバンナ地帯を農業開発する『プロサバンナ事業』」
- 日本経済新聞　2012年7月28日「政府アフリカ農業支援　住商と1000億円投融資」
- 日本経済新聞　2012年8月18日「伊藤忠、アフリカに穀物調達網　価格変動を回避 丸紅は南米産増やす」
- SankeiBiz（産経新聞）2012年8月20日「熱いブラジル　農業開発で日本と官民連携、モザンビーク投資本格化」
- ロイター通信　2011年8月15日　"INTERVIEW-Mozambique offers Brazilian farmers land to plant"(http://af.reuters.com/article/commoditiesNews/idAFN1E77E05H20110815
- Interview of Prof. Jayati Ghosh, "Africa Land Grab: New Century, More Colonisers"（http://www.stopafricalandgrab.com/ ）
- NHK World News, "The New way of Colonialism in Africa?"
- The Guardian 23 April 2012 "Campaigners claim World Bank helps facilitate land grabs in Africa: Food shortages and rural deprivation exacerbated by World Bank policy, says NGO ahead of land and poverty conference" （http://www.guardian.co.uk/global-development/2012/apr/23/world-bank-land-grabs-africa ）
- The Guardian 27 April 2012 "New international land deals database reveals rush to buy up Africa: World's largest public database lifts lid on the extent and secretive nature of the global demand for land" （http://www.guardian.co.uk/global-development/2012/apr/27/international-land-deals-database-africa）
- "Land conflicts and resettlement,"*MOZAMBIQUE News reports & clippings*, 21 September 2012.
- *Mozambique Political Bulletin*, 2009-2010.
- *Folha de S. Paulo*, 2011.8.14, "Moçambique oferece área de três Sergipes à soja brasileira" （http://www1.folha.uol.com.br/mercado/959518-mocambique-oferece-area-de-tres-sergipes-a-soja-brasileira.shtml）
- *Canalmoz*, 2011.9.9, "José Pacheco diz que a concessão de 6 milhões de hectares a brasileiros é uma má interpretação" (http://www.canalmoz.co.mz/hoje/20264-jose-pacheco-diz-que-a-concessao-de-6-milhoes-de-hectares-a-brasileiros-e-uma-ma-interpretacao.html)
-

- **■二次資料　その他**
- Funada-Classen, Sayaka (2012) *The Origins of War in Mozambique*, Tokyo: Ochanomizu Shobo.
- Hanlon, Joseph and Smart, Teresa (2012) “Soya boom in Gúruè has produced few bigger farmers – so far”, 10 September 2012.
- Juaréz, Eduardo and Pérez-Nino, Helena (2012) “Private Sector Development Case Study: tabacco contract farming in Mozambique”, presentation at the III Conferência do IESE (4 Sept. 2012: Maputo).
- Manning, Carrie (2010) “Mozambique’s Slide into One-Party Rule”, *Journal of Democracy*, Vol.21, Issue2.
- Masterson, Daniel with Funada-Classen, Sayaka (2004) *The Japanese in Latin America*, Illinois University Press.
- M. C. Peel et al. (2007) “Updated World Koppen-Geiger Climate Classification Map”, *Hydrol. Earth Syst. Sci.*, 11, 1633-1644. （http://www.hydrol-earth-syst-sci.net/11/1633/2007/hess-11-1633-2007.pdf）
- **鶴見和子（1989）「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子・川田侃『内発的発展論』東大出版会、3ー41頁.**
- **村井吉敬「内発的発展の模索—東南アジアのNGO・研究者の役割と運動」鶴見和子・川田侃『内発的発展論』東大出版会、183ー213頁.**
- **舩田クラーセンさやか（2007）『モザンビーク解放闘争史』御茶の水書房**
- **————————————（2011） 日本国際政治学会　2011年度研究大会部会報告　(2011年11月12日) 「紛争後の国家建設と民主的統治」「戦後モザンビークにおける国家統治と民主化」**
- **堀坂浩一郎（2012）『ブラジル　躍動の軌跡』岩波新書**